

カーナビ等と連携した 新たな情報サービスの開発

～道路の走りやすさマップのカーナビ等への活用に向けた共同研究～



高度情報化研究センター情報基盤研究室 室長 金澤 文彦 主任研究官 藤本 幸司 研究員 湯浅 直美

1. 道路の走りやすさマップについて

従来の道路地図は、道路を、道路管理者の種別により区分している。しかし、道路の走りやすさは、各道路毎の車線数やカーブ状況、歩道整備状況等、構造特性によるところが大きい。

そこで、走りやすさの実状を反映する情報発信のため、構造特性に着目した「走りやすさランク」によって道路を区分した「道路の走りやすさマップ」（紙地図版）（図-1）が作成されている。

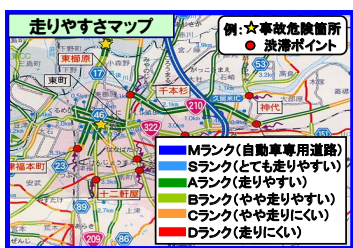


図-1 道路の走りやすさマップ

2. カーナビ等への活用の背景

近年は走行経路選択手段としてカーナビや経路探索Web検索サービスが主流となりつつある。また、道路の走りやすさマップがカバーしているのは時間的に変化しない情報のみであるが、道路の走りやすさは、これに加えて、交通量等、時間的に変化する情報も関係している。

走りやすさランクに加え、距離、時間、事故・渋滞情報、観光情報等、多種の情報を同時に関連付けて利用できるカーナビ等による経路検索が実現すれば、紙地図形式よりも総合的にバランスの良い経路選択が可能になると考えられる。さらに、注意情報等のリアルタイムな案内も可能になる。

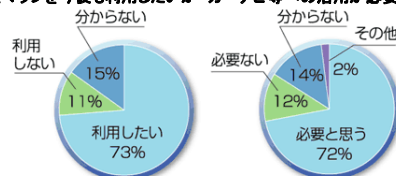
結果、運転疲労軽減、高齢者の安全運転支援（図-2）、交通事故削減、ひいては土地勘の無い観光客の利便性向上にもつながると期待される。

図-3は、紙地図版利用者アンケート調査の結果である。走りやすさマップの今後の利用意向は高く、カーナビへの活用が必要であるとする回答者の割合は7割以上と、期待が高いことが伺える。



図-2 走りやすさマップ活用カーナビのイメージ

走りやすさマップを今後も利用したいか カーナビ等への活用が必要だと思うか



調査期間：約2ヶ月間
調査対象：全国お試し版 道路の走りやすさマップ利用者（全国に20万部無料配布）
有効回答数：約1万5千以上

図-3 利用者アンケート結果

3. 共同研究の概要

カーナビ等に適合するデータへの変換、その仕様の検討などを効率的に行うため、実際にカーナビ等を開発している民間企業6グループと共同研究を開始している。

官民の役割分担としては、官側は、全国の道路の走りやすさマップデータの提供、データ更新方法の検討、共同研究全体の調整等を行っている。民側は、試作品・製品の開発などを担当している。

また、実務者定期連絡会を年に数回開催し、官民及び各社に共通的な課題の調整、進捗状況報告及びスケジュール調整等を行っている。

4. 今後の予定

2008年度は、ユーザーニーズ把握、社会的効果の検証等を行うとともに、道路の走りやすさマップのデータが活用されたカーナビ等の開発に向け、引き続き官民が連携して研究を進める予定である。

【参考文献】

「道路の走りやすさマップのカーナビ等への展開とデジタル道路地図の高度化について」2007.7 問い合わせ先：国土技術政策総合研究所 情報基盤研究室 機関誌「交通工学」2007年7月号（Vol.42, No.4）